

謹呈

# 池の平遺跡

—八千穂村池の平遺跡発掘調査概報—

信太亨地貿易放室殿

編集委員一同

1984. 8

八千穂村池の平遺跡発掘調査団



# 池の平遺跡

——八千穂村池の平遺跡発掘調査概報——

1984. 8

八千穂村池の平遺跡発掘調査団

# 序

## 八千穂村池の平遺跡発掘調査中間報告書の発刊に際して

昨年（昭和58年）8月10日から8月16日まで1週間にわたって八千穂村池の平地縁において、旧石器時代の遺跡の発掘調査が行われ予想以上の成果が得られ、こゝに調査結果の中間発表をいたすこととなりました。

池ノ平地縁は八ヶ岳山系橋枯山の北面傾斜地帯標高1,650mの高地であり現況はカラマツの人工林と白樺の自然林が多くレンゲツツジなど植物の群生地が広範囲に見られます。また八ヶ岳山麓ではこゝだけではないかと言われておりますが、それぞれの山峠からの流水が多く渓谷をつくって大石川となり豊かな水量がみられます。

昭和46年ごろ、この地域で遺跡の発掘が行われ、遺物として黒曜石を原石とした石器が発掘されたと伝えられていますが、その結果については明らかではありません。その後1昨年（昭和57年）この地域を通ずる林道八ヶ岳線の道路側壁から相当量の石器（黒曜石でつくられたもの）が発見され、旧石器時代人がこの地に住み石器をつくって狩猟の場となったところではないかと想像されるに至りました。このことは八千穂村の歴史上からも極めて重要なことと考えられます。本格的な発掘調査を要するものと思考いたしました。特に前回発掘調査の経過もあり学問的な解明が望まれておりましたが、幸いにも今回信大理学部地質学科の熊井久雄先生の御指導と御協力が得られ八ヶ岳研、野尻湖友の会の皆さんの積極的な参加があり、考古学的、地質学的両面の解明により今回発掘の成果をまとめていただくことが出来ました。

しかし、昨年の発掘では現地状況が予想以上に困難で木株、岩石など多く、予定グリッドの発掘が出来ず一部残されましたので本年も引きついで第二次の発掘を行うことといたしました。従って今回は発掘調査の中間報告の形でその結果をまとめていたくことになりました。

八ヶ岳山麓周辺には既に多くの遺跡があり池の平遺跡がこの地域においてどのような位置づけがされるかについては、本村の歴史上の問題点として考えることと共に大きな期待のされるところであります。

この中間報告の刊行できることを喜ぶものであります。この調査に御指導御協力を戴いた関係の方々に心から感謝申し上げるとともに今後引き続いて御協力くださるようお願いし、ご挨拶といたします。

八千穂村池の平遺跡発掘調査団長（八千穂村教育長）

出浦 深

## 例　　言

1. 本報告書は長野県南佐久郡八千穂村大字八ヶ岳下池の平に所在する池の平遺跡大反地点の発掘調査の概報である。
2. 発掘調査は1983年から2~3年間の計画で実施されるが、本報告書は、その第1年目の調査結果の概報である。
3. 最終的な報告書は、すべての調査ならびに出土品の研究が終了した時点で出版する予定である。
4. 本報告に関する編集ならびに執筆は下記の編集委員会の責任において行われたものであるが、遺物や層序に関して、必ずしも全員が一致した結論を得ているものではないことを付記する。このことは、今後の研究課題でもある。
5. 発掘出土品、写真等はすべて八千穂村教育委員会が保管している。
6. 発掘調査にあたっては、非常に多くの方々のご協力を得た。深甚なる謝意を表する。ことに、千葉大学文学部麻生 優教授には貴重なご助言を得た。また、発掘資材ならびに施設の利用などで、野尻湖発掘調査団、野尻湖博物館、八千穂村役場、八千穂村婦人会、信州大学理学部地質学教室にお世話になった。記して感謝申し上げる。

### 〈編集委員〉

飯田和明、石塚二侍子、木村純一、熊井久雄、小浦和子、小林恵子、小林純子、小林雅弘、小宮山一美、近藤洋一、佐々木徳治、実川順一、杉田正男、數土美幸、竹内 健、中村敦子、中村由克、深沢哲治、矢島勝美

## 目 次

I. 発掘に至る経過	1
II. 発掘日誌	5
III. 地形・地質	6
1. 地形	6
2. 発掘地周辺の地質	7
3. 発掘地の層序	14
4. 上部および最上部佐久ローム層の重鉱物組成	17
IV. 遺跡・遺物の概要	20
1. 遺跡の概要	20
2. 遺物の出土層準と分布について	20
V. 出土遺物	24
VI. 大反地点出土の尖頭器について	27
VII. 遺跡の立地・性格について	27
VIII. まとめと今後の課題	29
付. 引用文献	32
発掘参加者名簿	33
図 版	

## I. 発掘に至る経過

### 1. 遺跡の発見

八千穂村池の平遺跡は比較的早い時期から注目されてきた。すなわち、第2次大戦後の本格的旧石器文化研究の出発点とされる1949年の岩宿遺跡の発見から間もない頃に、すでに地元の故奥水利雄等によって表探が行われている。奥水等の招致によるものと推定されるが、1954年には芹沢長介が来訪し、駒出池付近で片面加工の尖頭器などを表探したという(井出、1982)。また、同じ頃に佐藤達雄もこの付近で尖頭器、石刀等を表探している(井出、1982)。

八ヶ岳周辺の遺跡が次々と調査されていった1960年代には、池の平遺跡もその一環をなすものとして、各種の遺跡分布図の中に明示されるようになった。その一例として、小松 康(1967年)による八ヶ岳周辺の遺跡分布図の中には、矢出川、御所平などと並んで、池の平牧場遺跡と無名の遺跡(駒出池付近)2ヶ所の遺跡が記載されている。池の平牧場遺跡の位置は現在の池の平遺跡の位置である。これらの遺跡の遺物保管者は、前記の故奥水利雄、佐藤達雄のほか、佐々木隆蔵であるという(井出、1982)。

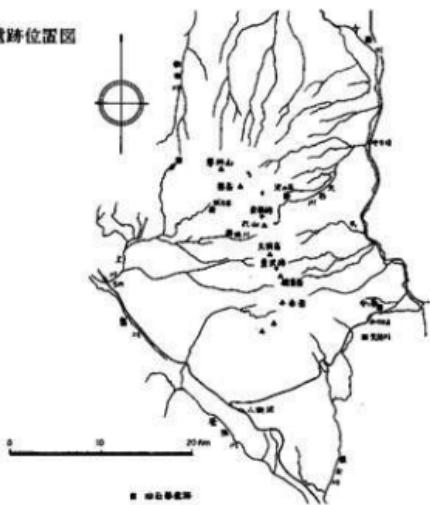
### 2. 1971年の発掘調査

この発掘は林道八ヶ岳線の工事に伴って遺物が発見されたために急撫実施されたものである。発掘調査受託者は八千穂村教育委員会であり、1971年(昭和46年)6月1日から6日までの6日間実施された。発掘地点は八千穂村大字八郡八ヶ岳下2049番地の塩くれ場地点、トリデロック地点、湧水地点の3ヶ所であった(第2図参照)。調査団は故奥水利雄を団長にして、長野県考古学会会員や信州大学の学生が中心となって編成された。

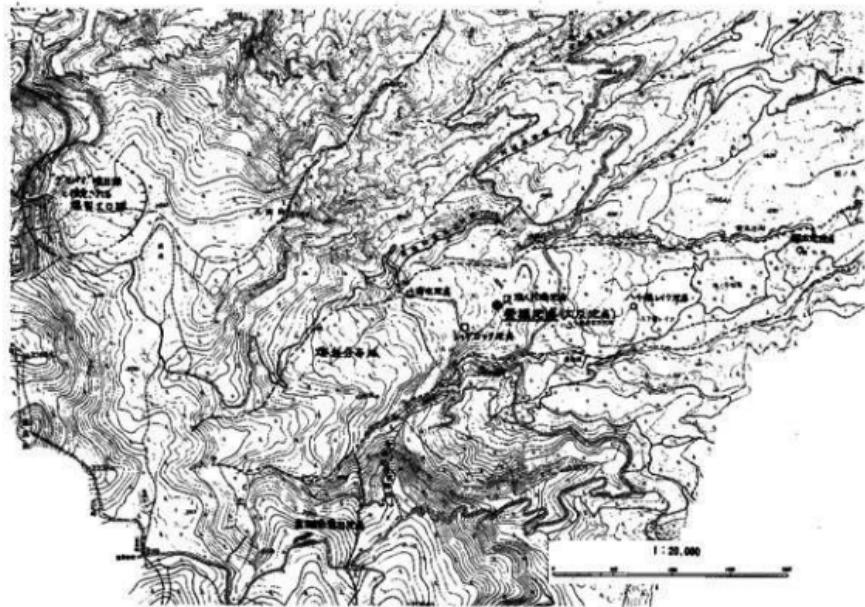
当時、八千穂役場に勤務していた本報告書執筆者の一人佐々木徳治は、この発掘に参加したが、6日間の発掘期間中3日間も雨に降られ、困難の多い発掘であった。発掘参加者は八郡の高見沢宅に宿泊し、夜は学習会も開催された。

発掘の成果については、公表されたものがないので、確実ではないが、大略以下のとおりであったという。すなわち、発掘した各地点のうち、塩くれ場地点は最初道路東側にグリッドを設定し発掘したが、遺物は何も出土しなかった。ついで、道路西側へ発掘位置を移動させ、ここにグリッドを新設した。新設したグリッドからはスクレイバー3点と彫器1点が出土し、加えて、表探でも尖頭器1点が得られた。湧水地点は塩くれ場地点より西へ500m林道沿いに登った標高1,740m地点に位置し、グリッドのすぐ西側に湧水がある地点である。ここでは、200m離れた地点で剝片が表探されたが、グリッドからは何も出土しなかった。トリデロック地点は湧水地点と

第1図 池の平遺跡位置図



第2図 池の平遺跡およびその周辺



塩くれ場地点の中間に位置する。この地点の道路山側側壁のローム層中から剝片が発見されたため、その位置にグリッドが設定された。出土遺物は剝片3点、大型石刃1点、縄文早期の土器片3点（茅山式土器、黒土中から）であった。

### 3. その後の状況

1971年の発掘終了後、八千穂村教育委員会は、塩くれ場地点とトリデロック地点とに発掘調査の概要にもとづき、遺跡表示板を建立した。

また、この発掘に参加した故郷原保真は他の地域の試料と一緒に、塩くれ場地点の“デカバミ”中の黒曜石破片を鈴木正男に送り、フィション・トラック年代の測定を依頼していたが、その結果が SUZUKI (1973) によって公表された。それによれば、この黒曜石片の年代は、 $11,600 \pm 450$  Y.B.P. および  $13,000 \pm 650$  Y.B.P. であるという。

執筆者の一人佐々木徳治は、発掘以降、塩くれ場付近でたびたび表採した。とくに、道路の法面に注目し、ここを中心に表採を行った結果、多くの遺物を得ることができた。塩くれ場地点より林道沿いに50~60m 登った地点の山側法面では、雨あがりには細かい無数のチップを見ることができた。この地点は、今回の発掘地点となった大反地点であるが、発掘以前に多数の尖頭器が表採されている。

池の平地域では、池の平遺跡だけでなく、かなり広い範囲で遺物の分布が見られる。第2図に示した駒出池付近や八千穂レイクの盛土部分などからも遺物が多く表採されている。

\* SUZUKI (1973) によれば、採取地点は茅野市の Ikenodaira となっているが、これは誤りで、採取者の故郷原保真は生前この訂正を要望していた。

### 4. 今回の発掘の経過

今回の発掘の発端には次のような背景がある。すなわち、1971年の発掘終了後、発掘で得られた遺物やその研究成果が村内に残されておらず、村の歴史の始源の様子を知りたいという村民の要望に答えられずにいることがある。また、10年間に渡る発掘後の、主として、佐々木徳治による表採の遺物の考古学的・地質学的検討を行うためにも、実際に発掘を行って、その詳細を明らかにしなければならない、という実際的な課題もあった。

このような背景の中で、当時信州大学の学生であった角谷邦明は、卒業研究のために八千穂村の地質調査を行っていたが、池の平遺跡の現状を佐々木から説明されるによび、この研究に協力することを約した。その後角谷の紹介によって、中村由克が八ヶ岳団体研究グループの協力によって、表採遺物の記載を主とした報告書を出版することを示唆した。1975年のことである。しかし、このときは諸般の事由から、この計画は実現しなかった。

1981年になって、佐々木の指摘をうけた八千穂村文化財調査委員会においても、池の平遺跡の

尖頭器密集地点の存在は、村の文化財研究の上でも重要な地点であることが認識され、発掘調査を含む研究の必要性が確認された。佐々木は、発掘を行うとすれば、地元主義に徹した住民参加のいわゆる「野尻湖方式」が最も良い方法だと考えた。また、少なくとも、発掘された遺物が村に残り、住民が自由に観覧できることを願った。

1982年の夏、八千穂村で地質調査を行っていた執筆者の一人小林雅弘は、佐々木から池の平遺跡の発掘計画を相談された。前述の経過もあり、小林はこのことを自身の所属する八ヶ岳団体研究グループならびに野尻湖発掘調査団の中南信野尻湖友の会に計り、協力を要請した。各団体とも、この計画に快諾を与えた、地元と協力して発掘を行うことを決定した。このことはすぐに佐々木をとおして文化財調査委員会に伝えられ、発掘を翌1983年に開始すべく、八千穂村の教育委員会を中心として準備が進められた。

## 5. 八千穂村池の平遺跡発掘調査団の結成

発掘を進めるに当たって、発掘主催団体は八ヶ岳団体研究グループ、中南信野尻湖友の会、八千穂村の3団体とし、調査団の結成にむけて動きだした。発掘調査の立案や運営を検討すべく、各団体から運営委員が選出されて、運営委員会が結成された。

第一回運営委員会は1983年（昭和58年）3月12日、に八千穂村福祉センターで開催された。運営委員の構成は、前述各団体から選出された委員からなるが、八千穂村の運営委員として、教育委員会、文化財調査委員会、史談会の各代表が参加した。

この会では、発掘への参加およびかけ、運営体制、発掘方法等が細かく討議された。この中で調査団の名称がきまり、团长に八千穂村教育長の出浦 深が選ばれた。

第二回運営委員会は6月6日に開催され、測量結果や「発掘参加のご案内」、「発掘参加申込書」などの様式、およびかけの範囲などについて話し合われた。

第3回運営委員会は7月19日に開催され、発掘の具体的スケジュールに沿って検討が行われた。とくに、100名以上の参加者の宿泊や食事の件で頭をいためた。結局、福祉センター全館を宿泊所にして、朝夕の食事は婦人会のみなさんにお願いすることになったが、婦人会のみなさんには、以後、お盆の期間を含んで大変お世話になってしまった。

発掘直前の7月30日には、地元の小・中学生の参加希望者のために事前学習会がもたれた。講師は熊井久雄と中村由克であった。

## II. 発掘日誌

1983年（昭和58年）8月10日（水）から同月16日（火）までの八千穂村池の平遺跡発掘調査の模様を簡単に振り返ってみると次のとおりである。なお、この期間中、毎朝「池の平タイムス」が発行され、前日の成果や解説、当日の目標やスケジュールなどが掲載されて、参加者全員に配布された。発掘終了後の毎夜、その日のまとめの会が福祉センターで開かれ、「そくほう」にその日の成果を図入りで記載して討論が行われた。ここでは、それらをもとに、日ごとの成果を中心述べる。

8月10日 午後1時集合、宿舎の福祉センターと発掘現場に別れてそれぞれ発掘の準備を行う。現場ではグリッド割出しの測量や発掘現場への道作り、テントの設営などを行う。夜は結団式を行ったあとコンバ。

8月11日 午前9時からくわ入れ式を行う。発掘参加者の佐々木宗昭さんが現職の神主なので式をとりしきってもらう。統いて表土はぎ。午後にわか雨のため発掘作業が一時中断したが、イー22グリッドで巨礫の層準が決定する、ア-20グリッドで多数の遺物が出土するなどの成果が上がる。とくに、ア-20グリッドから出土した尖頭器先端部は以前表採された基部とぴったり接合する。全グリッドで試掘溝掘さく。

8月12日 当初予想していたより出土層準が多いことがわかった。少なくとも3層準から遺物が出土する。ア-20グリッドでは前日にも増して多量の遺物が出土。巨礫の存在する部分からは遺物の出土しないことが判明。試掘溝が完成して遺物の出土層準がはっきりしていく。

8月13日 ア-20グリッドで尖頭器3点、イー18グリッドで尖頭器2点、スクレイパー1点、石核1点など出土。出土層準の相異による尖頭器の形態の変異が問題になる。ア-20グリッド、イー20グリッド、イー21グリッドを中心とする遺物密集区とイー18グリッド、ア-18グリッドを中心とする遺物密集区があることが判明。

8月14日 巨礫の分布と遺物密集区との関係から、古地理的に尾根状になった部分より少し低いところに点々と密集区が分布することがわかった。このことはこの遺跡の性格上重要なことであると、この日参加した麻生 優さんより示唆される。

8月15日 午前中発掘。午後から埋めもどし。遺物密集区では相変わらず多量の遺物が出土。ほとんど尖頭器とその整作過程のチップ。この遺跡の性格にも関連するが、全日程を通じて尖頭器が圧倒的に多い。しかも、ほとんど未完成ないし破損品である。ア-20グリッド、イ-20グリッド、ア-18グリッド、イ-18グリッドは完掘できず、来年再発掘することをきめる。台風の雨の中で埋めもどしに手まる。

8月16日 午前中埋めもどしと宿舎の片づけ。午後解散。台風のさ中の埋めもどしで予定より遅れたが、事故もなく発掘を終了する。

### III. 地形・地質

#### I. 地 形

##### a. 発掘地周辺の地形

八千穂村池ノ平遺跡周辺の地形図は第2図に示したとおりである。この付近の地形を大きく区分すると、i) 北八ヶ岳山麓部、ii) 2,100m高原面、iii) 開析山麓緩斜面、iv) 池の平熔岩分布域、に区分される。

i) 北八ヶ岳山麓部は蓼科山(2,350m)から茶臼山(2,360m)に至る稜線部分で、高山帯である。急峻な山腹をもついくつかの独立した峰を形成し、原生林と一部の露岩地帯とからなる。後述するとおり、これらの峰は、後期更新世の火山活動による熔岩円頂丘である。

ii) 2,100m高原面は、上述熔岩円頂丘の基部をなす高原状の平坦面で、麦草峠や雨池などの付近に広く発達する。草原や森林に被われているが、小規模な湿地や池が多く存在している。これらの凹地のうち、雨池などは明らかに爆裂火口の形態をもち、後述する後期更新世の最末期の火山活動に由来するものである。

iii) 開析山麓緩斜面はこの地域の大半を占める地形であり、前期更新世の北八ヶ岳火山の山麓緩斜面が深く解析された地域である。発掘地の北側では、大石川の支流八柱沢などが、北東～西南方向の深い谷を刻んでいる。この地域の大半は深い森林となっているが、尾根すじなどの比較的平坦な部分は別荘地などの開発が進められている。

iv) 池の平熔岩分布域は地形図でも明らかなとおり、前述の開析山麓緩斜面よりはるかに平坦な地形面を形成している。しかし、さらにくわしくみると、平坦な部分と比較的急な部分とがあり、熔岩流のflow-unitごとにいくつかの面に区分することができる。発掘地点に分布する大反熔岩の分布下限は八千穂レイクの西側までである。

### b. 発掘地の微地形

発掘地大反地点の地形を第3図に示す。この地点は前述の池の平熔岩分布域の中にあり、その東西に伸びた分布域の比較的上方に位置する。此の付近では熔岩分布の巾は約800m程度であるが、発掘地点は、ほぼその中央部にあたる。この付近での平均傾斜は17/100であり、約8°である。発掘地は、平坦ではあるが、わずかに凹凸があり、ほぼ北東～南西に作られた道路に対して、山側道路側壁が高くなったり、低くなったりする。グリッドを設定した地点は、その道路側壁が一段と高くなったりした所を中心としている。ア-20グリッド付近での道路面から側壁上面までの高さは約4mである。

発掘地から道路に沿って北東へ約70mの地点には深い谷があり、道路を横切っている。ここからさらに50m先に塩くれ場地点がある。また、道路に沿って南西へ約60mの地点にも深い谷があり、一部は湿地を形成している。

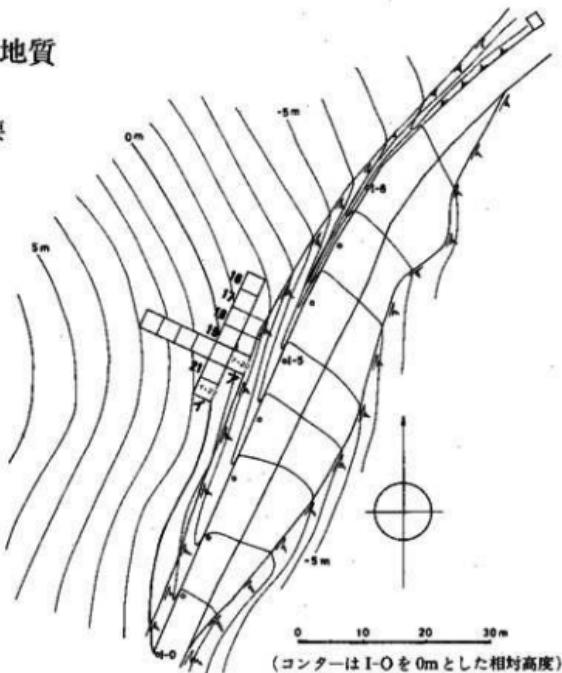
発掘地はカラマツの疎林に点々と白樺が生えている林で、地表には安山岩の巨礫が頭を出している部分もある。発掘地の景観については巻末の写真を参照されたい。

## 2. 発掘地周辺の地質

### a. 八ヶ岳火山の地質概要

八ヶ岳火山は、南北21kmにわたって標高2,000mをこえる火山が、東西2重の弧をえがく火山列である。この火山列はその地形および構成地質から南北、中、北八ヶ岳に三分される。それぞれの境界は南から夏沢峠と麦草峠（大石峠）である。

河内（1961）によれば、八ヶ岳火山の活動は、まず北八ヶ岳で始まり、その後東列に沿って中八ヶ岳、南八ヶ



第3図 発掘地の地形とグリッド配置図

岳へと活動の中心を移し、さらに、西列に沿って再び北八ヶ岳へ移り活動を終息したとされている。したがって、北八ヶ岳は、新・旧2回の火山活動が重複している場所といえる。

この火山山麓には、火山活動に伴って湖盆が形成され、ここに膨大な火山噴出物とこれらを挟在する湖成層が堆積している。これらの地層は八ヶ岳団体研究グループ（1982）によって詳細な研究がなされ、第1表に示すような層序区分がなされている。すなわち、風成ローム層は2つの不整合によって大きく3分される。ローム層区分は下位より八千穂ローム層、広瀬ローム層、佐久ローム層である。火山灰層位学の手法によって山麓の堆積物も区分され、八千穂ローム層を挟在する水成層は八千穂層群と松井くされ疊層に、広瀬ローム層を挟在する水成層は南佐久層群と市場層に区分されている。佐久ローム層を挟在する水成層は主として段丘構成層であり、段丘区分によって層序の基礎が立てられている。

また、これらの水成層は、化石や放射年代の測定によって年代が推定され、第1表に示すとおり、松井くされ疊層以下の各層は前期更新世に形成された地層、南佐久層群と市場層は中部更新統に比定されている。

さらに、八ヶ岳団体研究グループ（1982）によれば、山麓に形成された湖盆は、前述の火山活動の中心の移動に伴って変遷したという。すなわち、火山活動の中心が北八ヶ岳にあった前期更新世には、その山麓に当る北麓や東北麓に堆積盆地が形成され、中期更新世には、火山活動の中心が南へ移動するとともに、堆積盆地東麓から南東麓へと移動している。後期更新世に火山活動の中心が再び北八ヶ岳にもどると同時に、湖盆も北八ヶ岳の西麓に移っている。このように、湖盆の変遷は火山活動と密接な関係にあることが知られている。

#### b. 八千穂村の地質

発掘地を含む八千穂村に発達する第四系の層序は第1表の北東麓地域（北八ヶ岳サブ・グループ、1980）に示すとおりである。これらの地層の分布は第4図に示したが、それらの各層について以下に概説する。

八千穂層群は不整合により5累層に区分されているが、本地域にはそのうち中部累層以上が分布する。中部累層は岩相から2部層に区分される。下部部層は主として火山角礫岩層や降下スコリア層より成り、上部部層は下位よりスコリア流堆積物、降下スコリア層、軽石層より成る。上部累層は主として角閃石安山岩質の泥流堆積物や降下スコリア層からなる。発掘地北方の大石川支流八柱沢や湯沢の標高1,500m付近には、後述の最上部累層の下位に角閃石安山岩熔岩が分布する。この熔岩は上部累層との直接の関係は見られないが、上部累層に含まれるものと考えられている。最上部累層は、本地域において最も広い分布を示す地層であり、岩相や不整合などによって4部層に区分されている。主として降下スコリア層や火山角礫岩層、砂疊層、熔岩などからなる。最上部累層の堆積環境の大きな特徴は、標高1,100mを境にして、それより低いところでは水成相を示し、高いところでは風成ないし陸上堆積相を示すことである。

八千穂層群は前期更新世の北八ヶ岳火山の活動に由来する地層であり、本地域の主要地形であ

第1表 八ヶ岳山麓の第四系層序表（八ヶ岳山麓研究グループ、1982より引用）

る開析山麓緩斜面を構成する。また、麦草峠や雨池がある2,100m高原面にも点々と露出することから、この面の原面は、八千穂層群の開析をまぬがれた緩斜面である可能性がある。

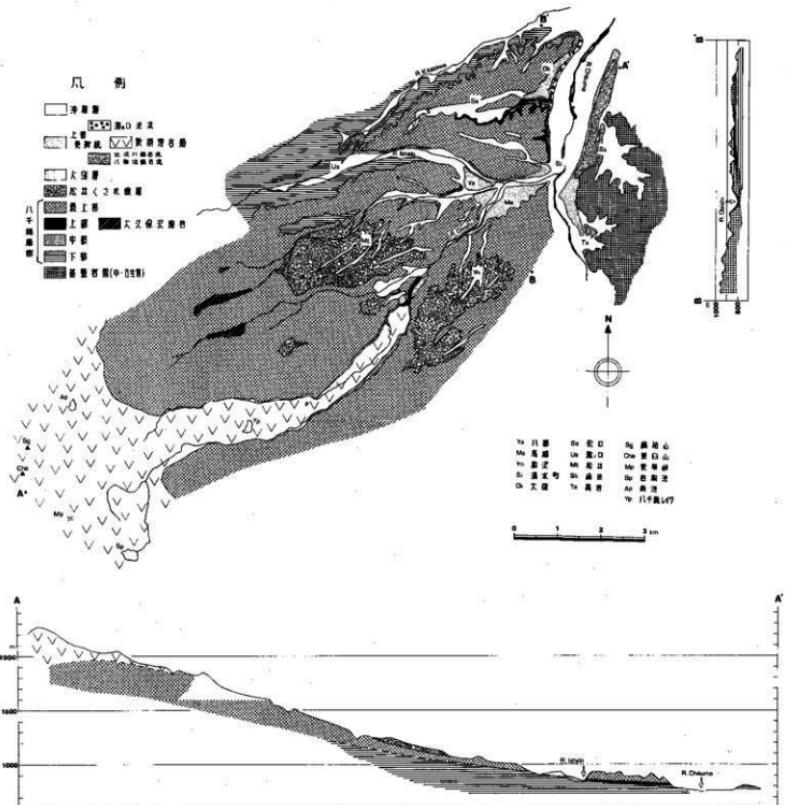
松井くされ疊層は、標高1,140 ~990mの平坦面（松井面）を形成する扇状地性の疊層であり、主として風化の進んだ安山岩礫などからなる。

大窪層は、八千穂村大窪周辺にのみ発達する段丘疊層、軽石層、泥流堆積物などよりなる一連の地層であり、比高60~80mの段丘面（大窪面）を形成している。本層中に挟在する火山灰層を鍵層として、本層は南佐久層群中の最下部累層に対比される。

上部更新統は、千曲川沿いに発達する段丘疊層や後期更新世の北八ヶ岳火山活動に由来する噴出物などからなる。それらは、下位より穂積疊層（八ヶ岳団体研究グループ、1976）、八ヶ岳疊層（新海、1973）、<sup>新海</sup>八ヶ岳疊層13（八木、1928）、海の口泥流（八ヶ岳団体研究グループ、1976）、池の平熔岩（稻垣、1972）を含む新期熔岩類および佐久ローム層（八ヶ岳団体研究グループ、1976）である。新期熔岩類は、後期更新世の北八ヶ岳の熔岩円頂丘の形成に係わる熔岩類であり、北八ヶ岳の山稜部と熔岩流面を形成している。池の平熔岩は、含かんらん石複輝石安山岩熔岩で、10数層のflow-unitからなり、発掘地点に分布する大反熔岩もそのうちの一層である。これらの熔岩流の噴出源はいずれも茶臼山付近である。

\* フィールドネーム“B<sub>1~3</sub>”とよばれる中部地方における広域火山灰層で、年代は約40万年前とされている。

\*\* 河内（1961）は本熔岩を池の平泥流としている。河内（1974）は同じものを池の平牧場熔岩としているので稻垣（1972）に従った。



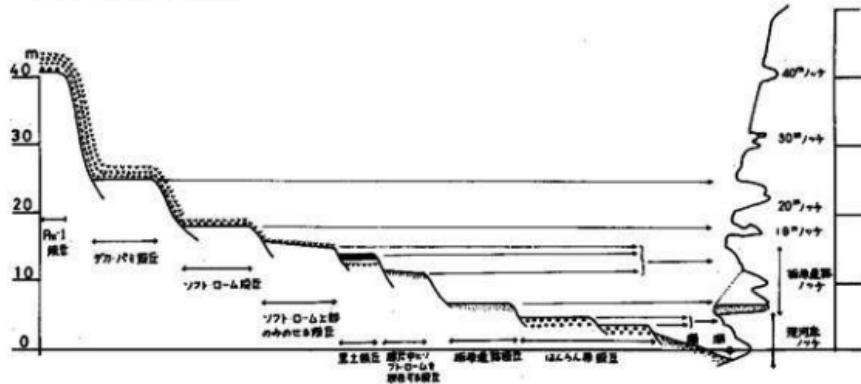
第4図 八千代村地質図(小林勝弘原図)

### c. 佐久ローム層

八千穂村池の平遺跡の遺物包含層は佐久ローム層である。したがって、この頃では、この佐久ローム層についてすこし詳しく記述する。佐久ローム層は岩相上の差異と段丘との関係から4区分されている(八ヶ岳団体研究グループ, 1976)。すなわち、下位から下部佐久ローム層、中部佐久ローム層、上部佐久ローム層である。下部佐久ローム層は鍵層“オレンジバミス”(飯島はか, 1968)(以下“”内に示す鍵層名はフィールド・ネームで示す)やPm-1(小林, 1961)を挟むローム層で比高70~100mの大原面を不整合に被い、比高40~65mの秋山段丘の段丘疊層中に挟在(一部整合で段丘疊層を被う)する。中部佐久ローム層は褐色のローム層からなり、比高20~35mの馬場平段丘の段丘疊層中から段丘面上に整合に挟在される。上部佐久ローム層は、鍵層“アオスコ”や“デカバミ”を含むローム層で、比高25mの段丘に整合に重なる。

八千穂村池の平遺跡の遺物包含層は上部佐久ローム層であり、本層中の“デカバミ”的ショットラック年代が13,000±650年前であることは経過の項で述べた。なお、“デカバミ”的噴出源については、そのアイソ・バック・マップの作成によって、横岳の東斜面雨池付近であることが輪垣(1972)によって明らかにされている。

上部佐久ローム層の最上部は下部に比較して固結度の低いローム層からなり“ソフトローム”ともよばれる。このソフトローム層の上位には黒色火山灰層が不整合で覆う。黒色火山灰層は完新統の火山灰層である。

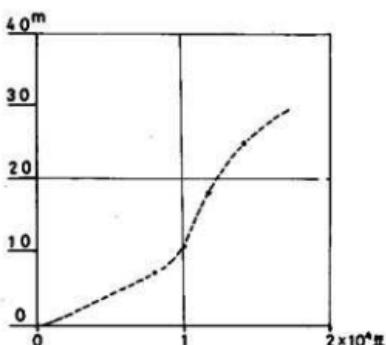


第5図 ノッチと段丘の対比(八ヶ岳団体研究グループ, 1976)

\*、間(1981)と小林(1983)によれば、佐久ローム層の下位にも上部更新統のロームがあり、最下部佐久ローム層と命名している。

“ソフトローム”の年代は直接には測定されていないが、八ヶ岳団体研究グループ(1978)によれば、千曲川支流の北相木川沿いに発達する段丘とノッチ、火山灰層、人類遺跡の年代などから次のように推定されている。すなわち、北相木川沿いに発達するノッチ群は、同じ北相木川沿いに発達する段丘群とそれぞれ対応し、その関係は第5図・第6図のとおりである。

この図から“ソフトローム”的形成年代は約11,500年前と推定される。すなわち、“デカバミ”的年代と柄原岩陰遺跡の形成年代とから、其の中間にあたるソフトローム段丘の年代を推定したものである。



第6図 ノッチと段丘の比高から推定される北相木川の下刻曲線  
(八ヶ岳団体研究グループ, 1978)

ソフトロームの年代は、このローム層が整合にのる18m段丘の形成年代をこの図から引くと、約11,500年前と推定される。

### 3. 発掘地の層序

#### a. 層序の概要と対比・年代

発掘地は、熔岩上に厚さ約2mのローム層が堆積しており、このローム層中より遺物が多数出土した。ローム層は、不整合により2層準に分けられる。(第2表参照)

不整合より下位のローム層は、比較的固結のよい黄褐色～黄灰褐色ローム層であり、普通輝石・しそ輝石・角閃石などを含んでいる。本ローム層は、4層の単層より構成され、下位より“レンガローム”“青スコローム”“デカバミローム”“黄モヤ”というフィールドネームがつけられている。とくに、“デカバミローム”中には含角閃石淡澄色軽石および黒曜岩片が含まれている。この軽石・黒曜岩片は、前述の佐久ローム層中の黒曜岩片を伴う淡澄色含角閃石軽石層“デカバミ”(前出)に由来するものと思われる。すなわち、“デカバミローム”は“デカバミ”降下に相前後して堆積し、このことからその年代は約13,000年前と推定される。

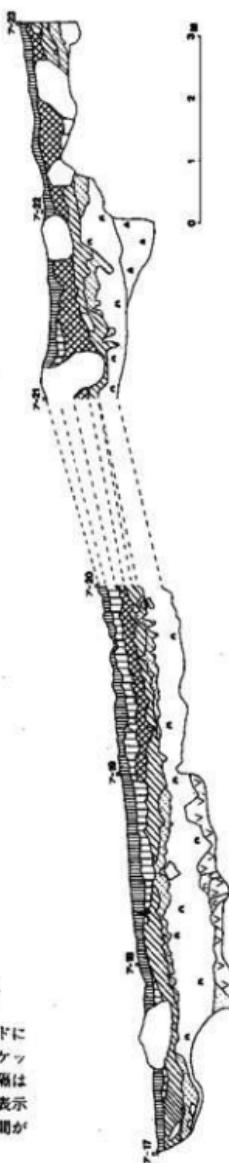
不整合より上位のローム層は、固結のわるい明黄灰色ローム層であり“ソフトローム”というフィールドネームがつけられている。本ローム層は、黒色火山灰層に不整合におおわれる。

次にこれらのローム層と佐久ローム層の対比について述べる。不整合より下位のローム層は、“デカバミローム”が“デカバミ”にはほぼ対比されることから上部佐久ローム層上半部に対比される。不整合より上位のローム層すなわち“ソフトローム”は、岩相上の類似および“デカバミローム”を不整合におおい黒色火山灰層に不整合におおわれることから、最上部佐久ローム層に対比されその年代は約11,500年前である。

ローム層を不整合におおう黒色火山灰層は、黒褐色から黒灰色の土壤化した火山灰層である。本層は、3つの単層より構成され、下位より“黒モヤ”“黒ボク”“黒土”というフィールドネームがつけられている。

第2表 発掘地（大反地点）の層序表

層序区分	柱状圖	地層名	フィールドセーム	厚さ cm	岩 相	年 代
黒色 火山灰層		Ⅲ	ローム	7 30	黒褐色の火山灰層	
		II	黒ボク	0 1 50	黒褐色を含む火山灰層	
		I	黒モヤ	10 1 40	黒を多く含む黒色の火山灰層	
伴 久 ロ ム 層		黄褐色 軟岩ローム層	ソフトローム	0 1 20	巻軸のわらいローム層 上半部には風化層が形成 されている	41500 BC
		明褐色 ローム層	モヤ	0 1 30	やや土壤化したローム層	
	△	明褐色 ローム層	デカハイ ローム	40 1 70	明褐色灰岩及び巻軸岩 を多く含むローム層 厚30cm程度の礫を含む	43,000 ±5000BP (F.T.)
	▲	黄褐色 ローム層	青スコローム	45	古灰～緑褐色の火山灰 を多く含むローム層 暗褐色灰岩及び巻軸岩 (青ハイ) を挟むする	
		明褐色 ローム層	レンガローム	15	巻軸の石を多く含む砂 質ローム層	
▽▽▽	▽▽▽	大反 地 層		50 +	青かんらん石複雜岩安山 岩岩屑	



第7図 試掘溝東側壁スケッチ

イー17グリッドからイー23グリッドにかけての東側（ア列側）の側壁のスケッチ。凡例は層序表に同じ。各杭の間隔は3m。杭から向って右側がその杭で表示されるグリッド。アー17とアー18の間がイー17グリッドの東側の壁。

## b. 地質各説

次に各地層を下位より記載する。

**大反熔岩**：発掘地周辺のなだらかな斜面を形成している含かんらん石複輝石安山岩熔岩である。表面が赤色化している部分がある。本熔岩は、現在の構枯山・茶臼山付近より流下してきたものと推定される。

**明褐色ローム層 “レンガローム”**：表面の凹凸がはげしい大反熔岩の凹地部分に堆積している。本ローム層は、層厚約15cmで砂質のローム層であり、大反熔岩から由来する細粒の岩片を多く含む。

**黄褐色ローム層 “青スコローム”**：“レンガローム”的上位に重なるやや固結のよい黄褐色ローム層である。層厚は約45cmで、径1cm前後の青灰から緑灰色火山岩片を多く含む。“レンガローム”的分布がせまい範囲に限られているため、多くの地点で直接大反熔岩をおおっている。また本層中には、暗青灰色粗粒火山灰層“青ハイ”が挟在されている。

**明黄褐色ローム層 “デカバミローム”**：“青スコローム”を非整合におおう明黄褐色ローム層である。“青スコローム”との境界はかなり起伏にとんでいる。本層中には、径1～2cmの含角閃石淡澄色軽石および径1cm前後の黒曜岩片を多く含む。また下位の大反熔岩の礫（径5～20cm）や軟化した安山岩礫などを含んでいて、ややく乱された様相を呈している。このことは、本層が斜面上で小規模な二次堆積をくり返しながら堆積したものと推定される。

**暗黃灰色ローム層 “黄モヤ”**：“デカバミローム”をおおうやや土壌化したローム層である。“デカバミローム”との境界は起伏にとんどおり、層厚も0～20cmと変化がはげしい。

**黄褐色軟質ローム層 “ソフトローム”**：“黄モヤ”以下のローム層を不整合におおう固結のわるいローム層である。分布は、発掘地の道路側（谷側・ア列のグリット）に限られている。層厚は数～10数cmと変化する。上半部に風化帯が形成されている。

**黒色火山灰層**：“ソフトローム”を不整合におおう黒色火山灰層は、岩相の差異によりⅠ～Ⅲに区分され、下位より“黒モヤ”“黒ボク”“黒土”というフィールドネームがつけられている。“黒モヤ”は、黒灰色火山灰層であり軟化した安山岩礫や赤色岩片を多く含み、また下位のローム層を「ブロック状」にとり込むなど、かなりくら乱された様相を呈している。本層の直上には径1m前後の含かんらん石複輝石安山岩の巨礫が含まれている。“黒ボク”は、植物片を含む黒色火山灰層である。“黒土”は、黒褐色火山灰層で表土に直接おおわれている。

## c. 発掘地の地質構造

発掘地は第3図に示したようなグリッド配置をなしているが、地形の項で述べたとおり、中央部付近に高まりのある道路上の林地内にある。この地点では、大反熔岩が凹凸のはげしい原地形を作っており、その凹地を埋めるようにして上部佐久ローム層と黒色火山灰層、表土が被覆している。その様子は第7図に示したとおりである。第7図は、ほぼ道路と平行な地質断面になっている。

大反熔岩の作る高まりは、イー22グリッドの山側からイー17グリッドの方向へ延びており、イー

22グリッド西側やイー17グリッドでは、熔岩が直接地表に露出している部分もある。これらの熔岩露出地から道路側へは、ローム層が次第に厚くなり、イー21グリッドでは1.5 m以上に達する。これらのローム層中には、山側の熔岩の尾根状の高まりから崩落したと推定される巨礫が挟在される。

巨礫を挟在する層準は2層準あり、下位より“デカバミローム”と“黒モヤ”層準である。“デカバミローム”の中では、とくに、下底部と上部に多く、礫径は20cm程度のものが多い。“黒モヤ”層中のものは、“黒モヤ”直上にのるものが多く、礫径は1mを越えるものもあり、下位の層準より大きいものが多い。

巨礫の平面的分布には、2つの特徴があり、そのうちのひとつは、旧石器遺物を産する地点(ユニット)には分布しないということである。また、第2には、大反熔岩の突出した尾根状の高まりの軸からはずれた斜面上にも分布しないということである。

これらのことから、巨礫の形成は、“デカバミローム”堆積時および“黒モヤ”堆積直後の2回に渡って、尾根を作っていた大反熔岩が崩落したことによると推定された。

#### 4. 上部および最上部佐久ローム層の重鉱物組成

発掘期間中に、遺物包含層である上部および最上部佐久ローム層について、層序を確認し、模式地との正確な対比を行う目的で、ローム層の柱状サンプリングを行ない、重鉱物組成の分析を行った。

サンプリングは、約5cm間隔でローム層を柱状に切りとり、イー17, 19, 21グリッドの壁面より、計80サンプルの試料を得た。分析にあたっては、1/8 ~ 1/16mmの粒度で分離した重鉱物のみをカナダパルサムで封入してプレパラートを作製し、偏光顕微鏡下で約200粒鑑定し、粒子数パーセントで表示した。(第8図)

##### a. 各層の砂粒組成の特徴

“レンガローム” opaq > opx > cpx > (ho)

不透明鉱物の含有量が多い。角閃石はほとんど含まれない。

“青スコローム” opx > opaq > cpx > ho > (bi)

輝石類の含有量が多く、全体の約80%を占める。単斜輝石の含有量比が比較的大きいのが特徴である。角閃石を約2%含有する。

“デカバミローム” opx ≥ opaq > opx > ho > (zr)

単斜輝石が“青スコローム”より約10%少ない。これ以外は良く似ているが、上部と下部にジルコンを約0.5 ~ 1%含む層準がある。さらに中部にはかんらん石を含有する層準がみられる。

“黄モヤ” opx > opaq > cpx > ho

“デカバミローム”に比べて、不透明鉱物の含有量が10~15%少ない以外はきわめて良く似ている。

“ソフトローム”  $\text{opx} = \text{opaq} > \text{cpx} > \text{ho} > (\text{ol})$

“デカバミローム”に類似する組成を示すが、上部にかんらん石を含有する層準がある。

“黒モヤ”  $\text{opx} = \text{opaq} > \text{cpx} > \text{ho} > (\text{bi})$

“黄モヤローム”より不透明鉱物の含有量が少ない。火山ガラスを含む。

“黒ボク”  $\text{opx} \geq \text{opaq} > \text{cpx} > \text{ho} > (\text{bi})$

“黄モヤ”とほぼ同一の組成を示す。“黒ボク” I, IIの区別はつけられない。

“黒土”  $\text{opx} = \text{opaq} \geq \text{cpx} > \text{ho} > (\text{bi})$

“デカバミローム”以上の層準で最も単斜輝石の量比が大きい。黒色岩片が卓越している。

### b. 重鉱物組成の特性にもとづく帯区分

重鉱物組成比および組成変化にもとづき、ローム層の帯区分を試みた。検討は主として2ヶ所以上の資料のあるものについて行われ、第8図に示される結果を得た。

Di-I帯：角閃石、単斜輝石の“デカバミローム”の中の最も下のピークを含み、下位のジルコン含有層準の上限を境界とした。

Di-II帯：角閃石、単斜輝石の第2のピークをなし、斜方輝石の量比の最も高い層準であり、かんらん石含有層準をもって上限とした。ジルコンは含まれない。

Di-III帯：角閃石、単斜輝石の第3のピークを含む、“デカバミローム”上限までの層準である。

Ym 帯：“黄モヤ”に相当する。

Si 帯：“ソフトローム”に相当する。

Bm 帯：“黒モヤ”に相当する。

Kbi I 帯：“黒ボク”的最下部で、単斜輝石の含有量が多い層準をさす。

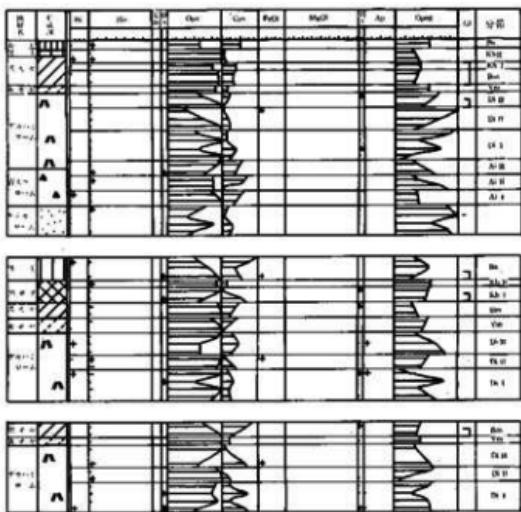
Kbi II帯：Kbi I帯以上で“黒ボク”的上限までの層準であり、単斜輝石が著しく少ない層準。

Bs 帯：“黒土”に相当する。

なお、“青スコローム”については3回にわたる組成の定向変化がみられ、この境界をもってAi-I～III帯に区分した。なお、“黄モヤ”以下の層準の帯区分は層序区分と一部を除き良く一致しており、層序区分のうらづけとなる。

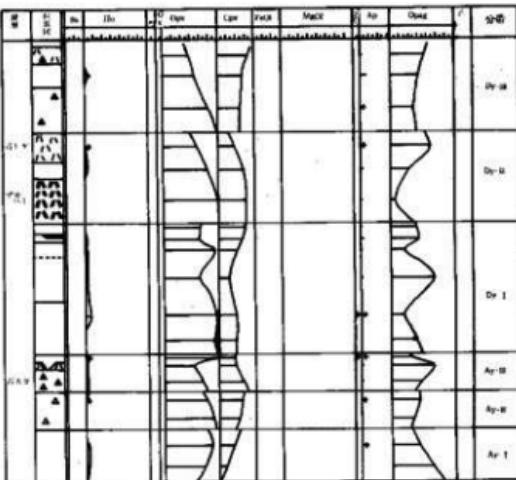
### c. 対 比

佐久ローム層の模式地である八郎池地域と重鉱物組成による対比を行った。八郎池地域の重鉱物組成を第9図に示す。両地域で、ジルコンの出現する層準を対比し、八郎池についてこの上下に分帶を行うと第9図のようになる。この分帶にもとづき対比を行うと、Di-I～III帯は Dy-I～III帯に、Ai-I～III帯は Ay-I～III帯にそれぞれ対比される。鍵層としてのデカバミは Di-



第8図 大反地点の重鉱物組成（木村原図）

（凡例） Bi : 黒雲母, Ho : 角閃石, Cm : カミングトン角閃石, Ox : 酸化角閃石, Opx : 斜方輝石, Cpx : 単斜輝石, FeOl : 鉄の多いカンラン石, MgOl : マグネシウムの多いカンラン石, Zr : ジルコン, Ap : 硫灰石, Opag : 不透明鉱物  
柱状図の凡例は、第2表に同じ。



第9図 八那地点の重鉱物組成（木村原図）

凡例は、第8図大反地点の重鉱物組成と同じ

II带の下半部に、青スコは Ai-III带にはほぼ対比されると考えられる。しかし、本地域でみられる Di-II带のかんらん石層準や、Di-III带のジルコンは、八那池では確認されず、対比の厳密な  
58 決め手に欠ける結果となっており、模式地での精度の高い分析が求められる。

#### d. 考 察

八那池との対比の結果からみると、Di-I带に属する発掘地の最下位の遺物包含層は、塩くれ場地点のデカバミ層準より下位であり、本遺跡の現時点での最も古い遺跡であると考えられる。

また、今回分析した3本の柱状試料の結果は、それぞれきわめて良く似た組成変化を示し、帯区分も可能であることからみて、遺物包含層は、2次堆積的な“まさりもの”ではなく、火山灰の順次の降灰堆積によって形成された地層であることを支持している。ゆえに、これに包含される遺物も、現地性である可能性が高い。

しかし、“黒ボク”I, IIとKb-I, IIのように帯区分と層序区分の一一致しない部分も残されており、単層単位の厳密な対比などについては、今後に残された課題である。とくに、“デカバミローム層”と“デカバミ”的関係については、より詳細な検討が必要であり、塩くれ場地点の遺跡との関係も、このことが解決しないと、対比が完成しない。

## IV. 遺跡・遺物の概要

### 1. 遺跡の概要

池ノ平遺跡は、長野県東部、八ヶ岳茶臼山山腹、標高1,650mに位置する。発掘地点は、茶臼山

\* 付近から大石川に沿って東に流出したと思われる熔岩（大反熔岩）が、約1kmの幅で形成する緩斜面の尾根筋中央に位置する。この緩斜面上には、塩くれ場地点・トリデロック地点、発掘地から約350m下方の駒出池付近をはじめ、旧石器時代の遺跡が多数存在する。さらに、今回の発掘調査中、発掘地の約900m上流側からも旧石器遺物が表採されている。

この緩斜面は、後期更新世のローム層に覆われている。遺物はこのローム層中の“デカバミローム層”と“ソフトローム”中より出土している。また、発掘地点には二次堆積による大反熔岩の巨礫が含まれる。この礫は“デカバミローム層”と“黒モヤ”の中に限られ、この巨礫の分布する地域からは遺物は出土していない。

### 2. 遺物の出土層準と分布について

遺物の出土層準は6層準認められている。下位より“デカバミローム層”I・II・III、“黄モ

\* ヤ”、“ソフトローム”、“黒モヤ”的順である。また、遺物はイー18グリッド及びア-20グリッドを中心とする区域に集中し、2つのユニットを形成している。

イ-18グリッドを中心とするユニットでは、遺物は“デカバミローム層”中のみ出土し、特に“デカバミローム層”IIに集中する。主な石器は、尖頭器5点・スクレイバー1点・尖頭器未成品5点である。

ア-20グリッドを中心とするユニットでは、遺物は各層準にまたがっているが、なかでも“デカバミローム層”IIIから“ソフトローム”下部に集中する。尖頭器9点・スクレイバー1点・石核3点が主な遺物である。

第3表 層準別出土遺物点数

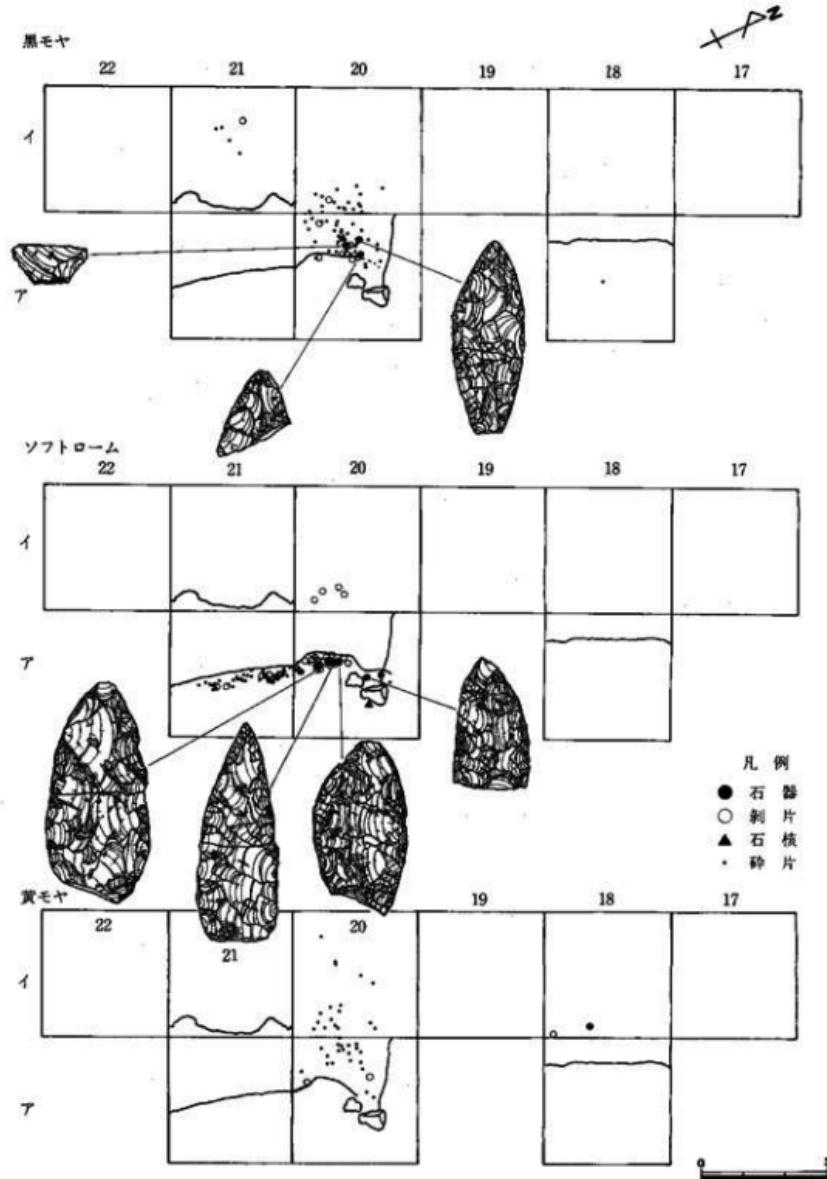
	ポイント マーク	スクレイ バー	コア	フレイク	スボール	ポイント 未完成品	合計
その他の	3						3
黒モヤ	2	1	2				5
ソフトローム	6			4	1		11
黄モヤ	1			1			2
デカバミローム	1		1			1	3
# II	3			1			7
# I	2			3			5
計	18	1	3	9	1	8	40

第4表 グリッド別出土遺物点数

グリッド名	出土遺物	重要品
ア-15		
ア-16		
ア-17	1	
ア-18	29	3
ア-19		15
ア-20	1308	15
ア-21	137	
ア-22		
イ-17		
イ-18	57	8
イ-19	29	
イ-20	41	
イ-21	7	2
イ-22		
グリッド外	303	
計	1922	28

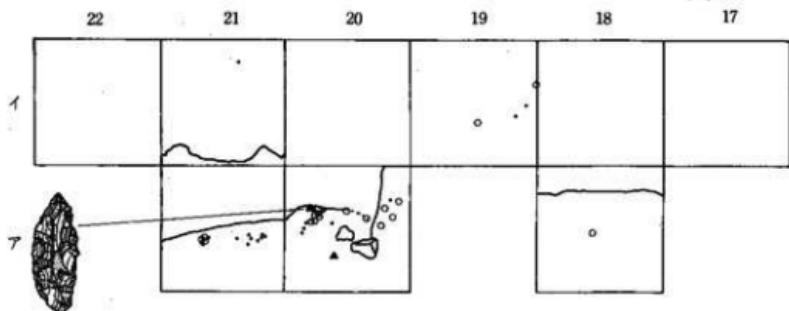
第5表 主な出土遺物

実測番号	図版番号	名称	番号	地層名	深さ(cm)	材質	大きさ(cm)	備考
1	8	尖頭器	ア-20, H-2	層準不明		黒曜石	3.2×2.3×0.6	
2	8	"	83TAK-45	"	"	"	"	
3	8	"	83GOM-1	"	"	"	4.8×3.3×1.1	
4	8	"	ア-20, g-194	黒モヤ	196	"	7.7×2.9×0.8	接着
5	8	"	ア-20, II-1	層準不明	"	"	7.7×2.9×0.8	
6	8	"	ア-20, g-191	黒モヤ	208	"	3.2×3.0×0.8	
7	8	スクレイバー	ア-20, g-149	"	192	"	3.2×3.0×0.8	
8	9	尖頭器	ア-20, g-11	ソフトローム	225	"		
9	9	"	ア-20, g-2	"	239	"	8.7×3.2×0.9	接着
10	9	"	82IK-30	層準不明	"	"		接着
11	9	"	ア-20, g-3	ソフトローム	238	"	8.8×4.1×1.1	接着
12	9	"	82IK-29	層準不明	"	"		接着
13	9	"	ア-20, g-1	ソフトローム	232	"		
14	10	"	ア-20, g-129	デカバミロームIII	208	"		
15	10	"	ア-18, g-15	デカバミロームII	191	"	4.9×1.8×1.1	
16	10	尖頭器未完成品	イ-18, g-6	"	237	"		接着
17	10	"	イ-18, g-5	"	237	"		接着
18	10	スクレイバー	イ-18, g-36	"	259	"		
19	10	尖頭器	イ-18, g-32	デカバミロームI	292	"	4.4×2.2×0.9	
20	10	"	イ-18, g-55	"	289	"		

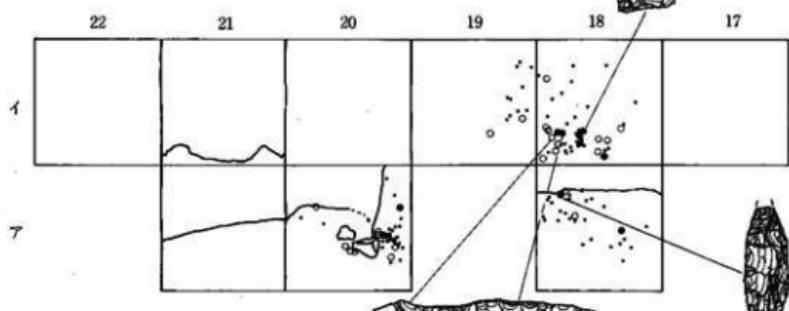


第10図(1) 層毎別出土遺物分布図

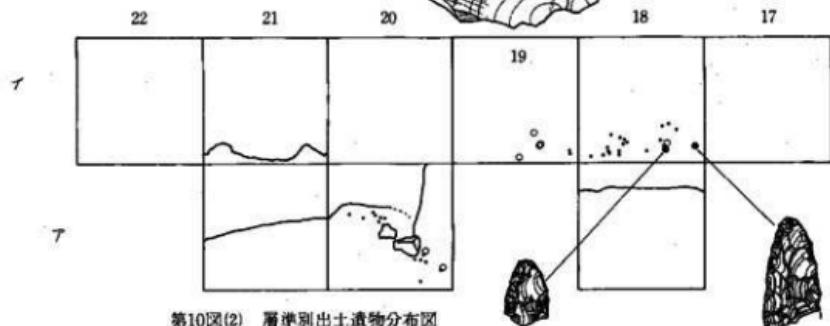
デカバミロームIII



デカバミロームII



デカバミロームIII



第10図(2) 着準別出土遺物分布図

## V. 出土遺物

出土した遺物は総数1,922点で、尖頭器18点・スクレイバー2点・石核3点・削片1点・尖頭器未成品8点、他に剥片・碎片が多数出土している。すべてがほぼ同質の黒曜石製であり、その石質が気泡が多く透明度の悪いものであることから、上流の麦草峠産のものと思われる。

以下、下位の層準からその概要を述べる。(第11図)

### “デカバミローム層” I

尖頭器2点と剥片などが出土した。尖頭器は2点とも破損しており、長さは不明だが細身で比較的厚いものである(19,20)。

### “デカバミローム層” II

尖頭器2点・スクレイバー1点・尖頭器未成品7点などが出土した。尖頭器は比較的小形で細身だが、片面が平坦なのに比べ、もう一面が山形で厚みを帯びているもの(15)と、調整加工があまり施されていないやや薄手のものの基部がある。スクレイバーは縦長剥片の側縁に刃部加工がなされている。尖頭器未成品としたものは、長さ12cm程の大形のものが多く、粗い両面加工が施されているが、一側縁は比較的細かい調整加工が施されている(18)。

### “デカバミローム層” III

尖頭器1点・石核1点・尖頭器未成品などが出土した。

尖頭器の石材は今回出土した遺物の中では最も透明度が高く、小形で厚手である。両面にもとの剥片の剥離面が残っており、調整加工も比較的粗く、片面はやや内側に湾曲している。もう一方の面は山形に厚みを帯びている(14)。形態は“デカバミローム層” IIの尖頭器(15)に近いものである。

### “寅モヤ”

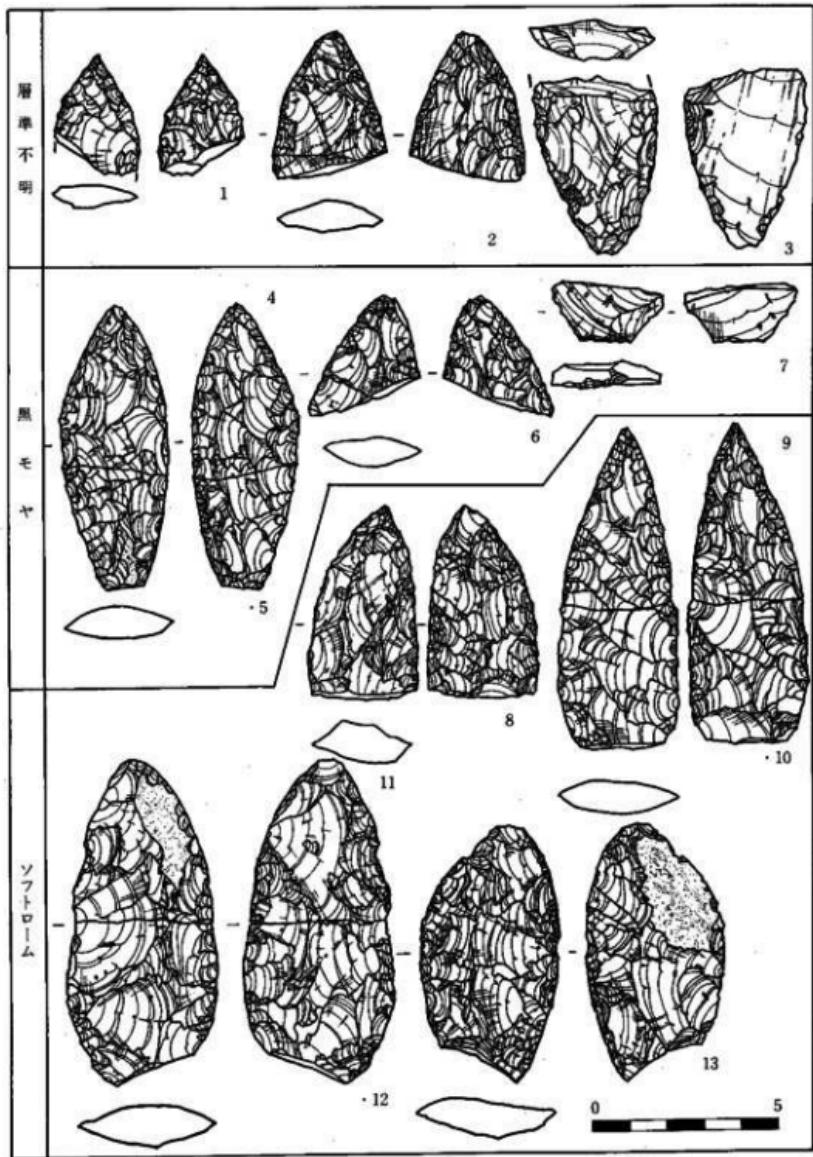
尖頭器1点などが出土している。この尖頭器は基部のみの欠損品で、石質が非常に悪く調整加工は難である。

### “ソフトローム”

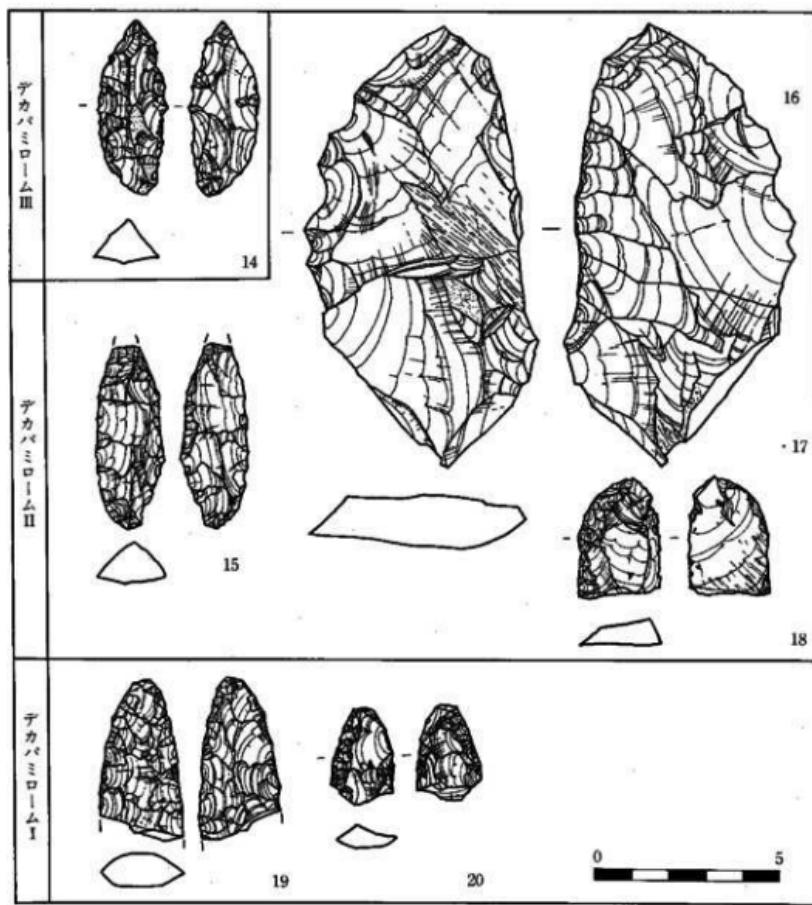
尖頭器6点・削片1点などが出土している。いずれも両面に細かく加工が施され、薄手で形が整っている。細身のもので先端の鋭いもの(9・10)、幅広で先端が丸みを帯びているもの(11・12,13)などがある。

### “黒モヤ”

尖頭器2点・スクレイバー1点・石核2点などが出土した。尖頭器の1点は同グリッド内出土の破損品2点が接合したもので、中形で薄手のものである(4・5)。もう1点は同様に細かい加工によるが、やや幅広のものの欠損品である(6)。スクレイバーは剥片の末端にわずかに加工が施



第11図(1) 実測図



第11図(2) 実測図

されたものである(7)。

**層準不明**

今回の発掘で出土層準を確認できなかったもの、表採資料及び捨石中よりふるい分けで出土したもので、詳細な出土地点を決定できなかったものを一括した。この中に尖頭器4点などがあり、ほとんどがアーチグリッドの“ソフトローム”下部の尖頭器の密集する層準のものと考えられる。このうち尖頭器1点は、以前佐々木らによって表採されたものと接合する。薄手で精巧なもの(1)のほか、片面加工(3)のものもみられる。

## VI. 池ノ平遺跡大反地点出土の尖頭器について

今回、大反地点で出土した尖頭器石器群は大きくわけて2群にわけられると考えられる。

1群は“デカバミローム層”的I～IIIに出土するものである。尖頭器は概して長さ4～5cm、幅2cm程度の小形のものが多い。断面が片面にはり出した三角形に近いものもみられる。また、尖頭器未成品とした大形の石器が作る。これはスクレイパーとしての機能をもったものという可能性が考えられる。

他の1群は“ソフトローム”と“黒モヤ”に出土するものである。尖頭器は長さ8～9cm、幅3～4cm程度の中形で比較的薄いものが多い。両面に緻密で細かい加工が加えられている。この中には、器形が幅広のものと、それより若干細かいものが含まれている。“ソフトローム”は谷側の限られた場所にのみ分布する地層で、山側では尖滅している。“ソフトローム”中の生活面は、山側にいくと“黒モヤ”下底に追跡されるため、“黒モヤ”から出土したものは“ソフトローム”出土のものと同一層準のものと考えられる。

これら2つの石器群は、尖頭器の技術・形態からみて相異なるものである。下位層のものは、粗い加工技術で細身の厚い尖頭器で代表され、上位層のものは精巧で薄手の尖頭器で代表される。地質学的にみて、下位層準が約13,000年前、上位層準が約11,500年前と推定されることからも、両石器群の形態差は意味があるものと考えられる。

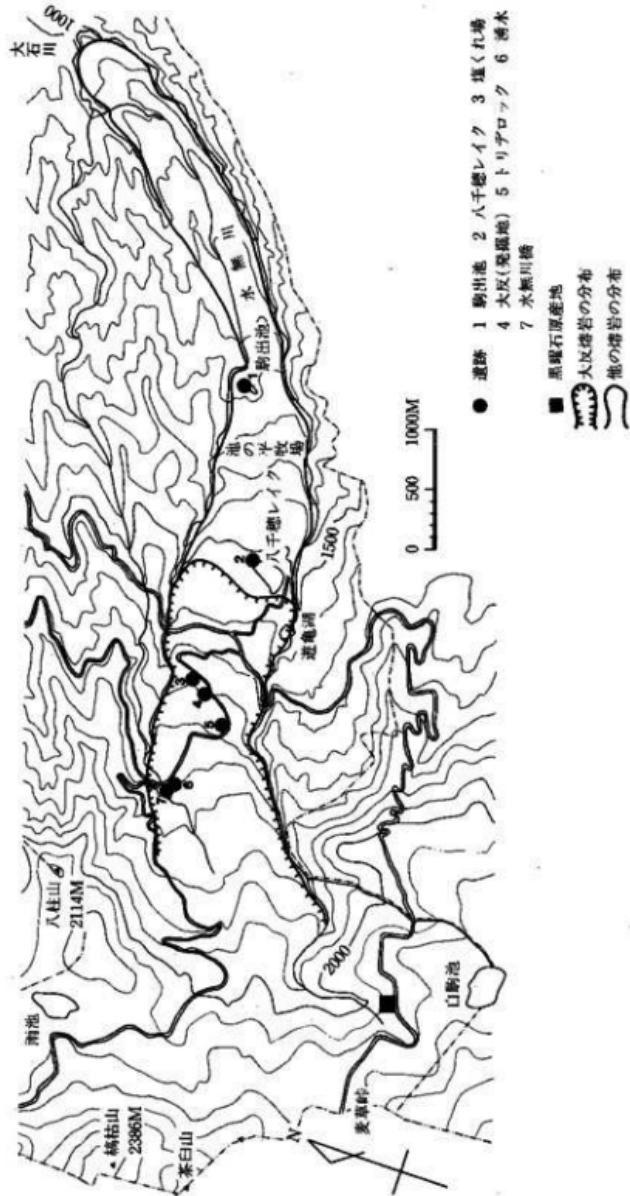
## VII. 遺跡の立地・性格について

池の平遺跡は、八ヶ岳山麓にあり標高1,650mという高所の遺跡である。今回発掘した大反地点は、茶臼山山頂から続く緩斜面の尾根部付近に位置する。この緩斜面は大反熔岩によって作られ、山中にあっては比較的開けた斜面である。

二ヶ所の直径5m程の石器のユニットは、ちょうどこの斜面の方向に直交して分布する。しかも、遺物の出土しないグリッドには熔岩の巨礫があり、遺物は巨礫のないなだらかな斜面に集中している。

また、付近の遺跡分布調査により、頂上よりの林道沿いに新たに2ヶ所、遺跡が発見された。したがって、塩くれ場・トリデロック・八千穂レイク・駒出池とあわせて7ヶ所の遺跡が確認されたことになる。これらの遺跡は大反地点と同様、熔岩によって形成されたなだらかな丘陵上に位置する。

このような高所での旧石器時代の生活の必然性について以下に考察する。



第12図 周辺道路分布図

まず、第一に、この熔岩流によって作られた比較的なだらかな開けた斜面とカモシカなど当時の動物の獣道にあたっていた可能性があることである。そのことから、この地域がそれらを狩りしていた旧石器時代人の重要な狩り場であったとも考えられる。

第二に、池の平遺跡から出土する石器は全て黒曜石で、かつ、石質からみて大石川源流の麦草岬産のものと考えられる。したがって、本遺跡が黒曜石の原産地に近く、石器製作が容易にできることも、ここを生活の場とした人々の重要な条件のひとつであったろう。

さらに、池の平は、遺跡の多い諏訪側から千曲川方面にむける交通路にあたったのかもしれない。このようなことから、1,650mという高所であっても、石器を使って狩りをする旧石器時代人にとって、池の平遺跡は重要なキャンプサイトであったと推定される。

## VIII. まとめと今後の課題

1983年（昭和58）8月10日から8月16日まで行われた八千穂村池の平遺跡発掘調査は地元八千穂村の小・中学生を含め158名の参加者を得て、大きな成果を上げることができた。ここでは、この発掘で得られた研究面での成果を中心に述べ、社会教育、発掘の方法論などに関する面については別の機会に報告することにする。また、この発掘調査が今後も引き続き実施される予定なので、この項では今次発掘のまとめと合わせて、次回の発掘の課題についても提言したい。

### 1. まとめ

今次発掘の成果を箇条書すると次のとおりである。

#### a. 複合遺跡（累積遺跡）

八千穂村池の平遺跡は、佐久ローム層の上部から最上部に至る風成ローム層中の遺跡であり、下位より、デカバミローム層Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、黄モヤ、ソフトローム層、黒モヤの6層準に渡って遺物が出土する遺跡である。これらの遺物包含層の年代は、デカバミローム層が約13,000年前、ソフトローム層が約11,500年前と推定される。したがって、この遺跡はただ一度のキャンプ・サイトというものではなく、数千年間に渡ってたびたび旧石器人が立ち寄った地点であることが推定される。

#### b. 尖頭器の製作

出土遺物の大半が尖頭器とその製作過程で発生したと思われる剝片と碎片である。このことは、この地点で作られた石器が尖頭器であり、もっぱらその製作のための地点であったことが推定される。また、得られた尖頭器は多くのものが破損しているものあり、接合するものもある。このことは、チップの量の多いことと合わせて考察すると、製作過程で失敗したものを放棄した

ことが推定される。これらのことと合わせて、この地点の遺跡の性格を判断すると、ここは少なくとも尖頭器の製作場であったことが知れる。ただし、その製作過程や居住の有無については確たる証拠はない。

#### c. 遺物密集地の意味

遺物は発掘地全域で一様に出土するのではなく、A-20グリッドを中心とする直径5~10m、I-18グリッドを中心とする直径約10mの範囲内で密集して出土する。いうまでもなく、これらのユニットは立体的に累重しており、同じ場所で数回の石器製作が行われたことがうかがわれる。いずれの場所もすぐ上流側（山側）に巨礫が存在し、この巨礫を供給した熔岩の尾根状の高まりの南側斜面にある。

#### d. 尖頭器の変遷

出土した尖頭器の形は、デカバミローム層中のものと、ソフトローム層・黒モヤ中のものと有意の差がみられる。すなわち、前者は小形で断面が三角形に近いものが多く、後者は中形幅広で薄いものが多い。このことは、尖頭器の形が時代の変遷とともに変化したことを意味するものかどうか、今後の研究課題である。狩猟対象の変化の有無と考え合わせる必要もある。いずれにしても、この間には2~3千年の年代差がある。

#### e. 遺跡の立地

遺物密集地のすぐ山側（北側）には巨礫からなる尾根状の高まりがある。密集地はこの高まりより南側へ少し下った場所である。尾根状の高まりは北東~南西方向に延びており、現在発見されている2つの密集地のほか同様な密集地が存在するかどうか今後の課題である。

一方、この尾根状の高まりは現在でも巨礫が露出しているなど植生は疎であり、白樺などが点々と生えるのみである。このことは、熔岩流出以降あまり表土の形成がないことを意味している。すなわち、この尾根状の高まりが、13,000年前にも植生がまばらで、旧石器人の往来に便利だったとも考えられる。

#### f. 高所遺跡の意味

八千穂村池の平遺跡は標高1,650m付近にある。また、出土した遺物の原石は気泡の多い黒曜石であり、麦草峠下の黒曜石露出地点のものとよく似ている。この付近にある沢の中には、この黒曜石の礫が点在している。したがって、前述の池の平熔岩（大反熔岩を含む）の尾根状の高まりを踏み跡として、八千穂駅付近の低地から黒曜石原石山近くまで登ってきた旧石器人の石器製作所が此の付近に点在した、という推論がなりたつ。

同様な遺跡は、麦草峠を越えた茅野市側の渋川遺跡や城之平遺跡にも見られる。

## 2. 今後の課題

以上のような成果とそれにもとづくいくつかの推論から、今後検討しなければならない課題は次のとおりである。

### a. 複合遺跡(累積遺跡)の下限と上限

池の平熔岩の上に分布する同様な遺跡はいつから形成されたのか、また、いつまで続いたのかを確定する必要がある。関東平野などで黒曜石を石材とする石器が多量に出現する年代は約21,000年前くらいであるという。本地域の下限がどこまで古くなるのかが問題である。地質層序の上でデカバミローム層以下の遺物の出土の有無を調査する必要がある。

上限については、トリデロック地点より縄文早期の土器が出土している。黒色火山灰層中の遺物を検討する必要がある。

### b. 文化内容

尖頭器製作にかかわる旧石器人の生活の復元、すなわち、キャンプ期間・居住場所・生活集団などの復元を、石器内容の検討、生活面の復元などから考察する必要がある。

### c. 遺跡立地の予測

池の平地域は今後開発されて行くと推定される。このことは、地形の項でも述べたように、この地域が周辺の山地に比較して、なだらかであり、諸観光施設を計画するのに適した地域であるからである。すでに、八千穂レイク周辺は、各種施設の増設が施行されている。

池の平地域には、現在知られている遺跡も多く、今後上記のような開発に際して、遺跡の有無が予測されれば、遺跡の存在可能地を開発に先立ってあらかじめ調査しておくこともできる。このようなことが可能かどうかを検討するために、前述のような遺跡立地条件がより細かく設定される必要があり、その予測にもとづいて、実際にチェックしてみることは有意義なことである。

## 引用文献

- 井出正義 (1982) 池の平遺跡、八千穂村教育委員会編、八千穂村の文化財、57。
- 飯島南海夫・田口今朝男・片岡健治・友野邦彦・六川忠信・小林将喜 (1968) 千曲川上流地方の第四紀地質 (その1), (その2)。地球科学、22, 1-10, 78-85。
- 稻垣 進 (1972) 北八ヶ岳東麓の火山岩類の層序と古地磁気。信州大学理学部卒業論文、1-63, MS.
- 河内晋平 (1961) 八ヶ岳火山列 I, II. 地球科学、55, 1-8, 56, 11-17.
- (1974) 萩科山地域の地質、5万分の1地質図・同説明書、1-101. 地質調査所、東京。
- 北八ヶ岳サブ・グループ (1980) 八ヶ岳北東麓における鮮新-更新統、島弧変動、no.2, 39-47.
- 小林国夫 (1961) いわゆる信州ローム。地質雑誌、67, 32-47.
- 小林雅弘 (1983) 八ヶ岳北東麓千代里周辺の第四系。信州大学理学部卒業論文、1-85, MS.
- 小松 康 (1967) 八ヶ岳周辺の遺跡、第四紀、no. 11, 75-76.
- 関 保幸 (1981) 八ヶ岳東麓小海町周辺の第四系。信州大学理学部卒業論文、1-69, MS.
- SUZUKI Masao (1973) Chronology of Prehistoric Human Activity in Kanto, Japan, —PART II, Time-Space Analysis of Obsidian Transportation. —J. Fac. Sci. Univ. of Tokyo, Sec. V, vol. IV, part 4, 395-469.
- 八木貞助 (1928) 信州南佐久郡畠八村産象化石とその地層について。地学雑誌、40, 308-322.
- 八ヶ岳団体研究グループ (1976) 八ヶ岳火山活動の概要——とくに中期洪積世以降の火山活動について—。地球科学、30, 87-94.
- (1978) ノッチの形成について—北相木川ぞいのノッチを例に—。第四紀、no. 23, 63-68.
- (1982) 八ヶ岳山麓に分布する更新統—火山活動にともなう湖盆の変遷について—。「島弧変動」地団研専報24号、287-298.

参加者名簿

ア行 青柳美保 青柳守宏 飯田和明 石塚二侍子 井出佐知子 井出 勤 井出文彦 井出正芳 磯貝千恵 今井光一 今井芳明 稲垣 進 上田 光 浮島久幸 牛山栄子 内山 高 卵月武彦 大金齊 大沢 匠 大島 浩 大村昭三 岡田昭弘 岡本郁栄 奥田述夫 小倉徹也 小沢なつ子 小沢範久 織笠 昭 力行 加藤きよい 加藤 啓 加藤 純 金川和人 兼松勇次 鎌 秀樹 上加世田聰 上村久三 亀山正義 鶴田知幸 北爪智啓 北爪 牧 北原祐子 木村純一 草野佐知 久保沢秀夫 熊井久雄 鴻野晶子 鴻野智良 鴻野久子 郷原綾乃 小浦和子 舞水美加子 小平瑞穂 小林和宏 小林恵子 小林 潤 小林純子 小林雅弘 小林美弥子 小林与之 駒村桂德 小宮山一美 小宮山進一 近藤洋一 サ行 斉藤尚人 坂本孝洋 桜井いづみ 桜井久美子 佐々木克彦 佐々木 透 佐々木徳治 佐々木春藏 佐々木久彰 佐々木秀幸 佐々木宗昭 佐々木基至 佐藤和幸 佐藤幸司 佐藤真也 佐藤友広 佐藤秀子 佐藤蓮子 笹崎孝幸 笹崎源太郎 実川順一 鶴田繁幸 萩原 武 萩原祐介 志摩さとみ 島崎真由美 清水雅子 白井 実 新海正博 末永和幸 杉田正男 敷土美幸 関克徳 関 勝志 関本真一 相馬和人 夕行 高木郁生 高木信彦 鷹野智由 武居比呂志 竹内 健 竹内建造 竹村健一 立岩尚之 立岩紀子 田中美恵子 田辺智隆 出浦晃彦 出浦祥子 出浦 深寺尾真純 飛田健二 力行 内藤修司 内藤 仁 中島広聖 中田真也 中田直志 中村敦子 中村由克 中山貴美子 成瀬達也 名和 輝 西尾 順 西田知佐子 西田哲也 ハ行 烟 邦弘 平原弘久 平林正晴 深澤哲治 降幡和章 古屋重徳 星山 圭 マ行 増田高也 松橋 均 松村孝史 松本俊幸 間室幸仁 丸山輝樹 水本 秀明 村松啓輔 村松泰規 百瀬孝治 森 幹尋 森下 聰 ヤ行 矢口裕之 矢島勝美 山浦倫治 山口 健 山越正義 山田真奈美 ワ行 渡辺修至 渡辺 徹 渡辺利幸 渡辺真美子 渡辺真理子 (以上158名)

# 図 版



発掘前の大反地点



発掘中の大反地点 スタッフのおいてあるところがアー19グリッド



くわ入れ式



表土はぎ



試掘溝はり



ビニールハウスの中の発掘風景



壁面の地質調査



火山灰の検鏡



地層見学会



まとめの会



コンバ



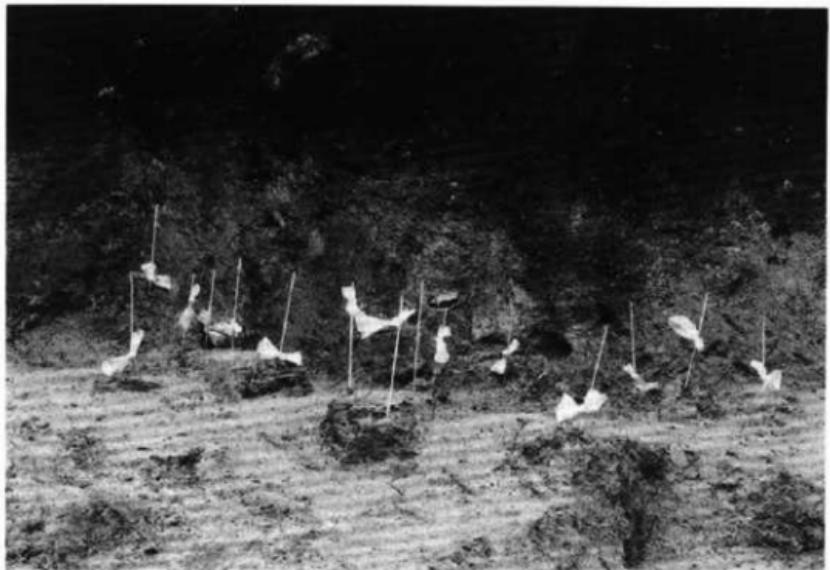
道路側壁面



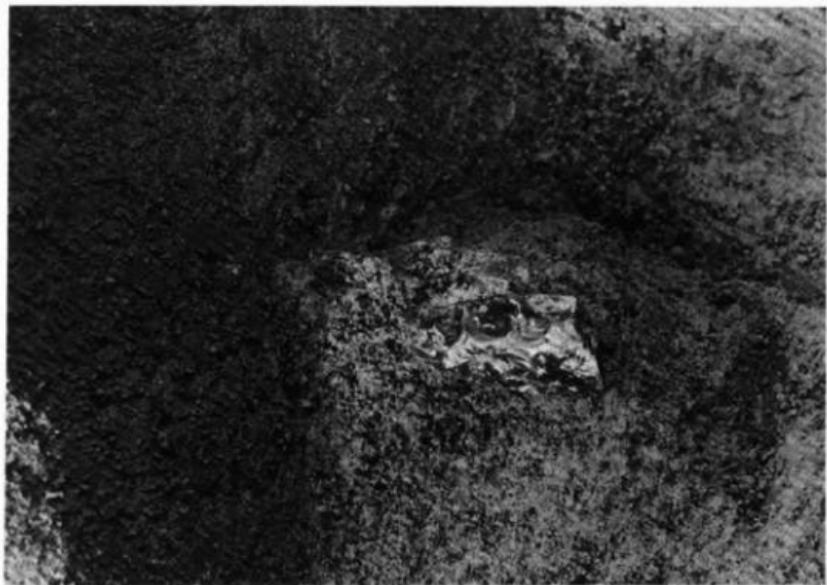
道路側壁面拡大



尖頭器出土状況（ア-20グリッド）



ア-21グリッド壁面遺物出土状況



尖頭器出土状況（イー18グリッド）



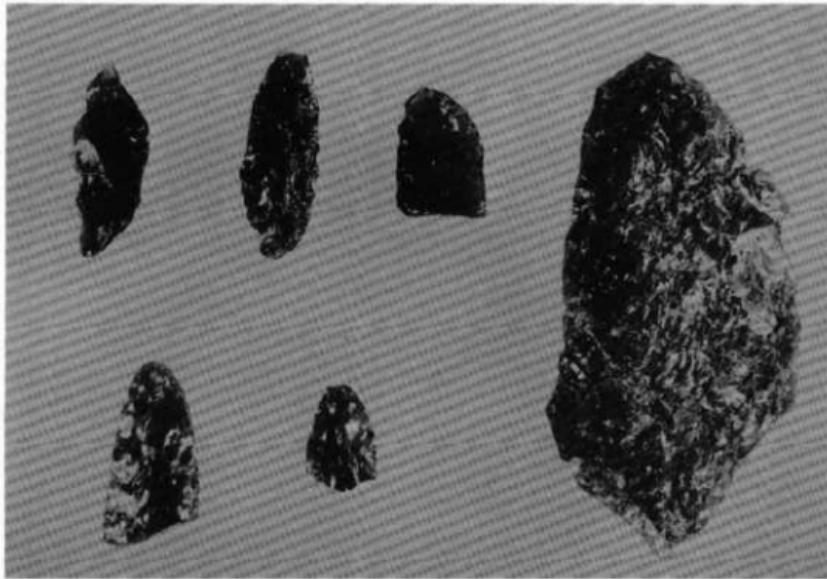
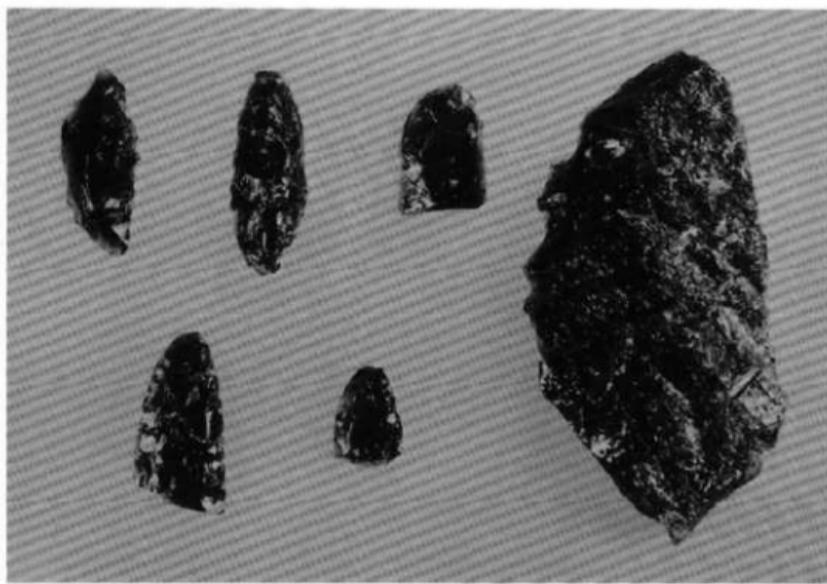
尖頭器未成品出土状況（イー18グリッド）



大反地点の出土遺物（黒モヤ・層革不明） 5/6



大反地点の出土遺物（ソフト・ローム） 5/6



大反地点の出土遺物（デカバミローム） 5/6

——八千穂村池の平遺跡発掘調査概報——

---

## 池の平遺跡

1984年8月1日 印刷

編集・発行：八千穂村池の平遺跡発掘調査団  
事務局

〒390 松本市旭3丁目1-1

信州大学理学部地質学教室気付

八千穂村事務局

〒384-07 南佐久郡八千穂村塙143

八千穂村教育委員会気付

印 刷：ほおづき書籍株式会社

〒380 長野市中越293 柴崎ビル

---

